

研究主題 「学び合い、高め合う子どもの育成」

～ 主体的・対話的で深い学びの姿を目指して ～

(国語科)

1 主題設定の理由

(1) 新学習指導要領より

新学習指導要領では、育成することを目指す資質・能力を3つの柱で整理し、それらを育むために子どもたちの主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこととしている。

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」） の視点からの授業改善について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること

【主体的な学び】の視点

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。



主体的な学び
対話的な学び
深い学び

学びを人生や社会に
生かそうとする
学びに向かう力・
人間性等の涵養

生きて働く
知識・技能の
習得

未知の状況にも
対応できる
思考力・判断力・表現力
等の育成



【対話的な学び】の視点

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。



【深い学び】の視点

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。

下中小学校でも平成29年度より、この視点を意識して研究をしてきた。今年度も研究に取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけた授業改善を行いながら、資質・能力、生涯にわたって進んで学び続ける力の育成を目指していきたい。

(2) 本校の「学校教育目標」および「めざす子ども像」から

学校教育目標

新しい時代を切り拓くための「生きる力」と「郷土愛」を育む
進んで学ぶ子 心豊かな子 たくましい子 地域を大切にする子

めざす子ども像

学び……………学ぶことのよさを知り、自ら学ぶ子
自分の思いや考えを伝える子
ＩＣＴ機器を学びに活用できる子
心……………進んであいさつする子
あきらめずにチャレンジできる子
やさしい心で人と関われる子
体・安全・地域……元気に運動する子
健康・安全に気をつけて生活できる子
地域を知りそのよさを感じることができる子

主体的な学びの具体的な取り組み

- ・ 新学習指導要領による教育課程の実施
- ・ 主体的・対話的で深い学びの授業
- ・ 校内研究と自己研鑽の充実
- ・ 家庭学習の定着に向けた家庭との連携

(3) 研究の経過

本校では平成18年度から「学び合い、高め合う子どもの育成」を目指して校内研究に取り組んできた。これまでの研究の経過は以下のような流れになっている。

<研究経過>

平成18年度～平成23年度	(5年間)	国語科を通して
平成24年度～平成27年度	(4年間)	算数科を通して
平成28年度	(1年間)	理科・社会科・生活科を通して
平成29年度～令和元年度	(3年間)	理科・生活科を通して
令和2年度～		国語科・算数科を通して

平成29年度から子どもたちが学ぶことが楽しいと思えるような授業作りを目指して、学習内容と日常生活を関連させながら理科・生活科の研究を進めた。それにより主体的に問題解決しようとする姿がたくさん見られるようになった。そして、平成30年度では、自分たちで問題解決していく授業を目指して研究を進め、単元構想を作ることによって思考の流れに合った学びの姿が見られた。令和元年度からは、子どもたちの疑問や試行錯誤する場や学びを働かそうとする姿を想像しながら前後の単元のつながりを意識して単元構想を作っていく研究を進めた。そのことにより、目的・相手意識をもって、「何をするのか」、「何のために行うのか」、「どのように行うのか」といった今まで身に付けてきた理科や生活科の学びを発揮しながら主体的に取り組む姿が見られるようになった。授業の中でなかなか高め合う姿を見られなく、高め合う姿を具体的にし、共通理解を持って研究を進めていく必要性が明らかになった。

令和2年度からは、「学び合い・高め合う姿」について、国語科と算数科において発達段階ごとに「主体的に学ぶ姿」「対話的に学ぶ姿」「深く学ぶ姿」として目指す子ども像を明確化した。そして、それをもとにしながら各学年で単元構想を作成し、ブロックで共有した。コロナ禍の影響で研究授業・協議は、5・6年生の2学級の実施となった。ただ、研究を進める中で、学び合い（協働的な学習）には、子どもたちが「どのように学ぶか」という見通しを持ちながら課題（問題）を解決したり、学び方や考え方を振り返ったりといった「子ども主体の授業」作りの視点が大切であるということが明らかになった。

2 今年度の研究の方向性

これまでの研究の流れ、そして昨年度の反省をもとに今年度の研究を次のように計画した。

＜下中小学校学校教育目標＞

◎新しい時代を切り拓くための「生きる力」と「郷土愛」を育む
進んで学ぶ子 心豊かな子 たくましい子 地域を大切にする子

研究主題

「学び合い、高め合う子の育成」

～ 主体的・対話的で深い学びの姿を目指して ～

＜着地点＞

令和4年度	① 主体的・対話的で深い学びを意識した学び合い、高め合う子の姿の明確化。 ② 学び合い、高め合う子の育成をめざす単元・授業作りと実践
令和3年度	① 主体的・対話的で深い学びを意識した学び合い、高め合う子の姿の見直し。(できる範囲で) ② 学び合い、高め合う子の姿を意識した単元づくりと実践
令和2年度	① 主体的・対話的で深い学びを意識して、学び合い、高め合う子の姿を設定。 ② 学び合い、高め合う子の姿を意識した単元づくりガイドラインの作成

①学び合い、高め合う子の姿の見直し

発達段階に応じて学び合い、高め合う姿を設定し、その実現へ向けて手立てを講じつつ、実践する。協議の都度、見直しをする。

②単元づくりと実践を通した単元作りガイドラインの改善

興味・関心を高める導入、学びを働かそうとする姿や学び合い高め合う姿が見られる流れ、学びの実感のもてるまとめ・振り返りなど、協議したことをもとに集約していく。

＜3年間の重点＞「学び合い、高め合う子の育成を目指した授業作り」（国語科・算数科）

- ① 「学び合い、高め合う子」の姿の明確化を図る。(日々の授業・校内研)
- ② 学び合い、高め合う子の姿を意識した単元・授業作りとその共有化。
・これまでの研究の成果（日常生活との関連・問題解決学習・目的意識）を参考に、手立てを模索する。

主体的に学び合う子の育成

- 導入で疑問や考えたいことを話し合い、目的意識をもって学習を行うことは主体的な学びにつながる。
- 単元を貫く学習課題を設定することは、意欲の継続につながる。など（元年度の研究）

確かな学力の育成

- 問題解決学習を繰り返し行うことで、自分なりに実験方法を考えることができるようになった。
- 問題解決学習を繰り返し行うことで進んで調べたり、工夫したりすることができる。など（30年度の研究）

日常生活の関連

- 理科で学んだことを日常生活と関連させることで、想像する力を育められる。
- 学習内容を日常生活と関連させることで、進んで問題解決に向うことができる。など（29年度の研究）

学習意欲の向上

- 自分なりの考えがもてるように指導することで、分かった喜びから学習意欲を高められる。
- 単元を貫く課題を設定することで、問題解決に向うことができる。 など（28年度の研究）

◎職員研修による個々の授業力向上

- 職員研修の場を生かし、個々の授業力や教師としての資質向上を目指すための基盤作りを行う。

3 具体的な研究内容

(1) 学び合い、高め合う子の姿の設定

- ①昨年度の校内研究で、発達段階を考えながらブロックごとに学び合い、高め合う姿を検討した。改めて、ブロックごとに「主体的に学ぶの姿」「対話的に学ぶ姿」「深く学ぶ姿」の姿を見直す。
- ②設定した姿は研究していく中でズレが出てきたり、新たな姿が見いだされたりすることが考えられる。そこで、ブロック研の中で加除修正をしていく。

(2) 学び合い、高め合う子の姿を意識した単元づくりと実践（状況に応じて実施の仕方を変更していく）

- ①ブロックで検討した「学び合い、高め合う子の姿」を意識しながら単元構想図をつくり、研究授業・協議を行う。全体研は、上学年と下学年で各1回行う。上学年・下学年ブロックで全員1回ずつ研究授業・協議を行う。
- ⑦指導案について
 - ・構成は、単元構想図に本時案をつける。本時案については、授業（単元）への思い・本時の視点を記載する。（別紙参照）
- ①子ども主体の単元・授業づくりを意識する。

下中小の子ども主体の授業（案）

○子どもと創る授業・単元

・「何のために学ぶ？」

子どもと課題（問題）を見つける、作る。子どもと目的・相手意識を確かめる。

・「どのように学ぶ？」

子どもと学び方を考える、選ぶ。子どもと見通しをもつ。

・「何を学んだ？」

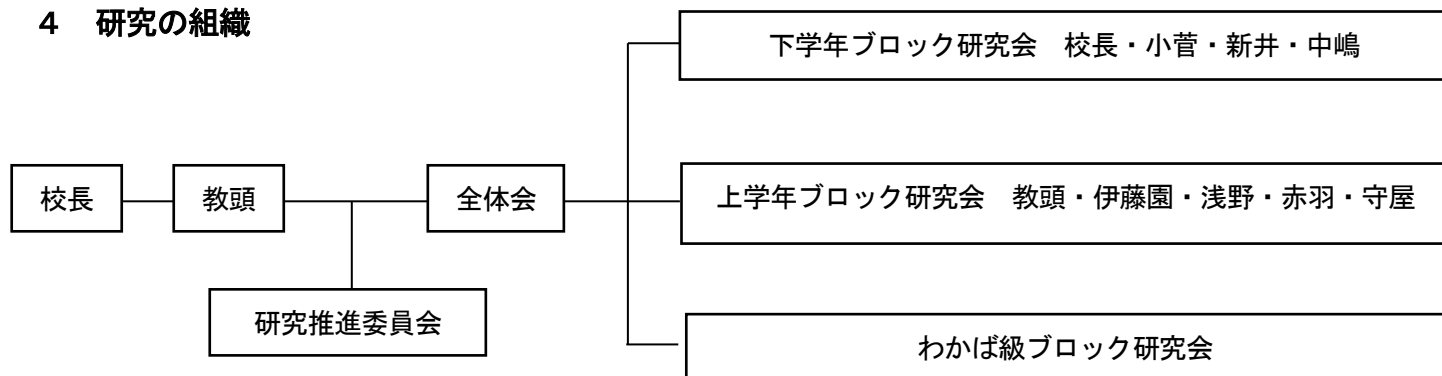
子どもと学びをまとめる。自己・相互評価で学びを確かめる。

⑧付箋と模造紙を使って研究協議を行う。

- ・付箋は、ピンクが成果、黄色が課題。1枚の模造紙の中に、教師と子どもそれぞれの視点及び本時の視点について、成果と課題を分析する。課題については、解決方法を検討する。協議終了後は、職員室後ろの壁面に掲示する。
- ・明確になった成果と課題は、次のブロック研で意識していく。

- ②それぞれ先生方の単元構想をつくった時の意図や願いなどを「単元づくりガイドライン」という形で整理していくことで、共有化できるようにしたい。ガイドラインについては、困ったときの拠り所になるものにできたらと考える。

4 研究の組織



○研究推進委員会は、校長・教頭・推進委員長（伊藤園）・研究主任（柴田）・研究副主任（曾我）・・・で構成していく。